九州医療科学大学

2025
健康管理センター活動報告書 No.19



九州医療科学大学　健康管理センター

温故知新～安井息軒先生について

九州医療科学大学　健康管理センター長
吉武　重徳

はじめに
皆さん、短い秋を楽しんでいましたか～。

温故知新とはなんと深い故事であろう。英語では Learning from the past to understand the present.とすればよりわかりやすいかもしれない。私は'Reminiscing and Digging into the root（ラジオパーソナリティのユキ・ラインハート：訳）に共感を覚える。

来年 2027 年は国スポ・障スポ宮崎が開催される。2026 年はその前年であり予行の意味もあってかこの延岡でも様々な全国系のスポーツ大会が誘致され盛んであった。興味があっても遠方のためめったに観戦できないこともあるが、今回９月に女子ソフトボールの全国大会が延岡のスタジアムで開催された。私も全国レベルでの試合を見たことがなかったので足を運んでみた。新スタジアムでは全国大会にふさわしく試合も盛り上がったようであった。よくみると今回、延岡開催だけでなく日向・宮崎と３会場だった。その中の決勝戦の会場名が「SOKKEN 」スタジアムだった。当初、私は SOKKEN とはネーミングライトによる警備会社？の冠名と考えてみたが実はそうではなかった。

約 20 年前の 2007 年、その出会いは突然だった。学生新入生歓迎の趣旨で行縢登山・合宿があり参加した。施設の廊下の壁には教育的意味もあってか郷土が生んだ偉人の肖像画や写真が壁一面に掲示されてあった。その中に私自身は聞いたことのない名前で「安井息軒」とあった。もちろん見たこともなく誰かもわからず何よりも異形と形容する容貌だった。それはここを訪れた小学生は怖がって眠れないのでは？と思わせるくらいだった。そして彼が宮崎あるいは日本を代表する学者かつ教育者であることを知りました。

安井息軒（やすいそっけん）は、1799 年（寛政 11 年）に現在の宮崎県宮崎市清武町に生まれた、幕末を代表する儒学者です。幕末から明治へと大きく社会が変化する時代に、学問の研究だけでなく、教育や人材育成にも力を尽くした人物として知られています。

故郷の清武で父とともに教育に携わった後、飫肥藩の藩校「振徳堂」で教え、江戸に出て私塾「三計塾」を開き、多くの若者を教育した。三計塾には全国から学生が集まり、門下生からは、後に政治や軍事などの分野で活躍する人物も多く輩出された。現在も清武町には安井息軒の旧宅や記念館があり、その生涯と功績が伝えられているようです。

興味深いのは「安井夫人」と佐代との関係である。

安井息軒を語る際には、妻の佐代夫人についても触れる必要がある。息軒の学問を支えながら質素な生活を送り、夫とともに生涯を歩んだ女性で息軒が学問の道を進み、多くの仕事を成し遂げることができた背景には、この佐代の支えを忘れるわけにはいけない。

作家森鴎外は、人から話を聞き取り佐代をモデルとして小説「安井夫人」を書いている。この作品によって、息軒の妻として生きた佐代の人物像も広く知られるようになったようだ。

おわりに

安井息軒は、幕末の日本で学問を究め、多くの人材を育てた儒学者である。その業績は著作を残したことだけではなく、教育を通して次の時代を担う人々を育てたことにもある。また、「一生の計は少壮の時にあり」という言葉からは、若い時から努力することの大切さが分かる。さらに、妻の佐代夫人が息軒を支えたことや、森鴎外が「安井夫人」としてその生涯を描いたことからも、息軒の人生が周囲の人々との関わりの中で築かれたことが分かる。

なぜ、これほどの偉人が県北では知られていないのはさておき、故郷宮崎で顧みられなかったのか。推測であるが、戦前の教育が儒教と相性がよくここで多く登場し語られ戦後は反転してしまったようである。そういった点で小村寿太郎とは対照的であるかもしれない。息軒さんを私自身知らなかったと思っていたが、実は高校時代に「安井夫人」を読んでいたのであった。おそらく「高瀬舟」と同じ文庫本内に短編としてあり、小説の背景が江戸時代中心にまとめられた流れの中で読んでいたのを思い出しました。

最近は短い秋で、あっという間の冬ですね。

皆さんの秋はどんな秋ですか。読書にも温故知新みたいな一面があっても良いと思います。

ちなみに私の秋は「アンジェラ・アキ」です。今の学生はほとんどわからないようです。

附記：「手紙 ～拝啓　十五の君へ」がヒットしたのは 2006 年です。

なんと、私にとっては SOKKEN を知る前！でした。

目　次

I.　組織構成ならびに構成員　・・・・・・・・・・　1

II.　学生相談室の利用状況　・・・・・・・・・・　2

III.　保健室の利用状況と今後の課題　・・・・・・・・・・　4

IV.　付録　・・・・・・・・・・　7

１．事例で考える学生相談のポイント

２．学内ＡＥＤ設置場所

Ⅰ　組織構成ならびに構成員

1．組織構成

平成 18 年度までは、健康管理センターは主として学生相談のみを実施してきたが、平成 19 年度に機構改編を行い、従来の業務である学生相談業務に保健業務も加え、学生の心身の問題に包括的に取り組める体制となった。

健康管理センター
- ① 保健室ー疾病、外傷などの応急処置ならびに学生の健康相談・健康診断にかかわる業務を行う。
- ② 学生相談室ー学生の抱える諸問題についてカウンセリングを行い、その精神的健康状態の向上を図る。

2．令和 7 年度構成員

構成員は以下のとおりであり、それぞれの専門領域に応じて学生相談室業務と保健室業務を分担して実施した。

・センター長	吉武　重徳
・専門委員（学生相談）	前田　直樹
	西田　美香
	横山　裕
・学生相談員	沖田　世理子
	甲斐　十貴枝
・事務職員	加藤　泰輔（学生課と兼務）

Ⅱ　学生相談室の利用状況

１．学生相談室の利用状況

令和７年度の学生相談室の利用者数は、実数合計 46 件、延べ数合計が 69 件で前年度と比較すると実数は９名減、延べ数は 25 名減であった。相談件数は６月、10 月が最も多く、次いで７月であった。主訴別では「健康問題」が最も多く、次いで「適応問題」であった。「健康問題」は６月が多く、次いで 10 月、11 月が多かった。一方「適応問題」は７月が多く、次いで５月が多かった。また男女比については実数では女子の相談者数が２名多いが、延べ数では男子の相談が 11 名多かった。

表１「学部別学年別来談者数（年間）」について、学部別の利用者数では、実数、延べ数ともに薬学部が最も多く、次いで臨床心理学部、社会福祉学部であった。学年別の利用者数では、１年次と４年次が多く、次いで2、３年次となっている。

表２「学部別主訴別来談者延べ数（年間）」について学部別にみてみると、社会福祉学部では「進路問題」、「健康問題」、薬学部では「適応問題」、「健康問題」が多く、臨床心理学部については、「健康問題」が最も多くなっている。

昨年度は主訴として「修学問題」、「健康問題」が多かったが、今年度は「修学問題」「適応問題」が減少し、「健康問題」が増加した。

「健康問題」は、梅雨時期の６月や 10 月、11 月に多い傾向にあった。６月は学生生活もある程度落ち着き始める時期ではあるが、友人関係でのトラブルも起きやすく、また定期試験を目前に控えたこの時期に学習面で悩み苦しむ学生も多くいた。10 月、11 月については、夏の疲れの出やすい季節の変わり目の時期に後期課程が始まり、同じく授業や試験、臨地実習、友人関係等で不安や悩みを抱え、体調不良を引き起こす学生も多かった。

学年別では １ 年次には、新生活への適応や新しい学生生活における友人関係や修学に関する悩みや不安が多く、４年次は卒業や国家試験に向けての修学の不安や就職活動に対する不安や疲労等から健康問題に陥るケースも多かった。

相談にあたっては必要に応じて受診勧奨をおこなったり、関係する教職員とも連携を図りながら対応した。

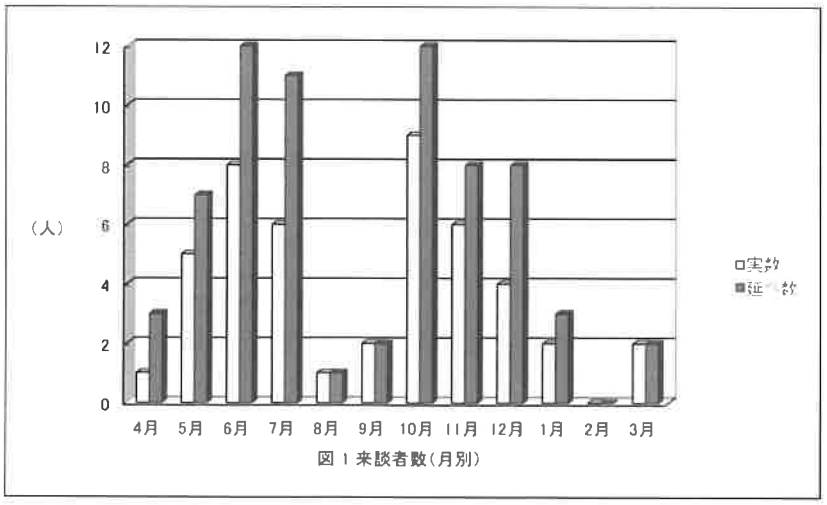


図１来談者数（月別）

表1　学部別学年別来談者数（年間）

		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	通信他	実数合計	延べ数合計
社会福祉学部	男	1							1	2
	女				8				8	8
薬学部	男	6	6						12	21
	女		2	1	3				6	7
生命医科学部	男								0	0
	女	2		2					4	6
臨床心理学部	男	4		4	1				9	17
	女	1	2	1	2				6	8
合　計	男	11	6	4	1				22	40
	女	3	4	4	13				24	29
	計	14	10	8	14				46	69

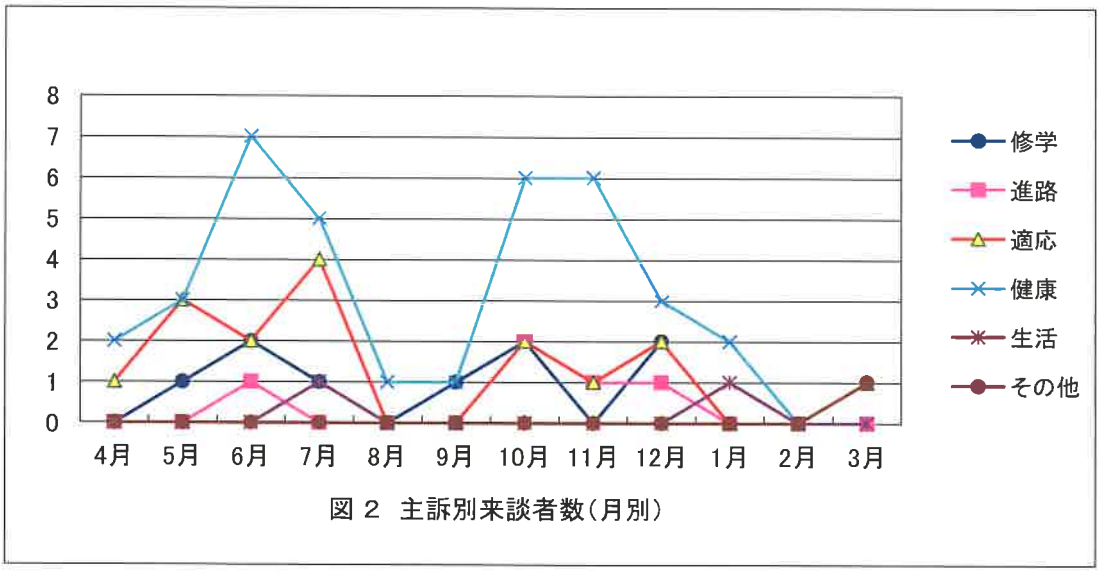


図 2　主訴別来談者数（月別）

表2　学部別主訴別来談者延べ数（年間）

	修学	進路	適応	健康	生活	その他	合計
社会福祉学部		4	2	4			10
薬学部	7	1	10	8	2		28
生命医科学部			1	4		1	6
臨床心理学部	2		3	20			25
合計	9	5	16	36	2	1	69

沖田　世理子

Ⅲ　保健室の利用状況と今後の課題

1．保健室の利用状況

令和 7 年度の保健室利用者総数（累計）は 226 名（学生 176 名、教職員他 50 名）で前年度よりも 32 名の減少であった。（表 4）学生相談には延べ 14 件に対応し前年度（37 件）から大幅に減少した。

所属別の利用状況は社会福祉学部 24.3%、薬学部 32.3%、生命医科学部 4.4%、臨床心理学部 16.8%、教職員 16.8%、その他 5.3%で前年度よりも臨床心理学部、その他の割合が増加した。（図 3，表 4）

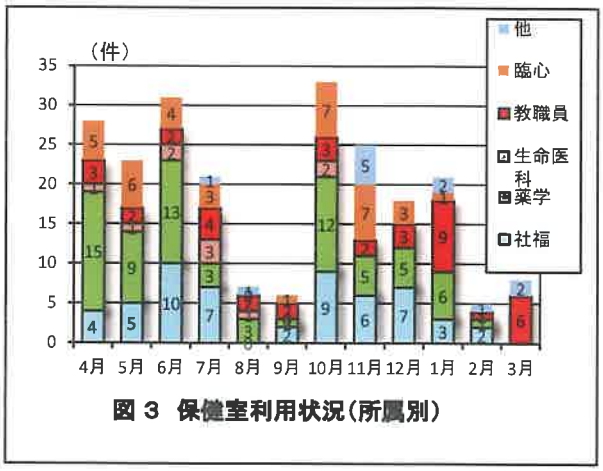


図 3　保健室利用状況（所属別）

月別の利用者数は 10 月が最も多く次いで 6 月であった。10 月は特に談話の数が多かった。年間の傷病別利用者数は創傷処置が最も多く、次いで風邪症状であった。内科症状では 4 月～6 月、10 月～11 月の利用が多く、10 月に消化器症状が目立った。外科症状では 4 月、6 月、10 月の利用が多く、軽度の創傷処置が多かった。（図 3，図 4，図 5、、表 4）

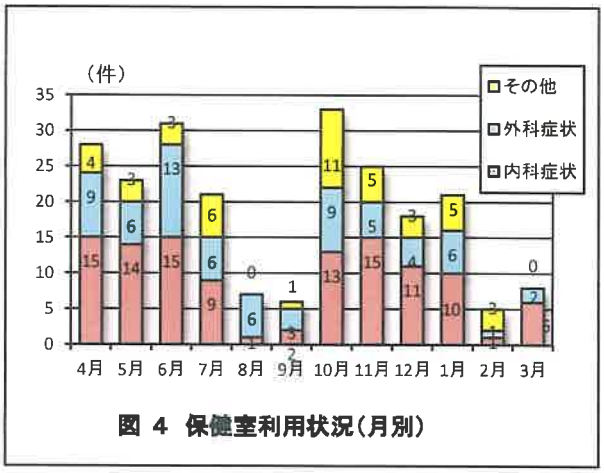


図 4　保健室利用状況（月別）

コロナ罹患報告は 4 月～7 月に多くあり、最も多かったのは 7 月であった。また県のインフエンザ罹患報告は 11 月下旬～2 月に流行警報レベル超えが続いた。学生の罹患者も 11 月から増え始め 12 月、1 月と多く、11 月～2 月の数を前年度と比較すると約 4 倍であった。百日咳の罹患者があり保健室の利用もあったが、学内への拡大はなかった。

曜日別の利用者数は木曜日、火曜日が多く全体の約 53%であった。（図 6）来室時間帯では 12 時台が最も多く、次いで 10 時台であった。（図 7）ベッド休養時間帯も来室時間帯と同じ 12 時台と 10 時台が多かった（図 8）。ベッド休養者数は 51 件で前年度と比較すると 21 件減少し、利用者全体に対する割合も減少した。（表 3）また今年度は救急搬送の数が 5 件（学生 3 件、その他 2 件）あり例年と比較すると多かった。

2．今後の課題

休憩・談話の目的で訪れる学生も少なくない。「誰かに話しを聞いてほしい」「少し休むことで気持ちを切り替えたい」といった心理的ニーズを背景に来室する学生が多い。対人関係やコミュニケーション、社会的スキルに問題を抱える学生も増えている。保健室を安心して相談できる居場所として維持するとともに、学生相談室や教員、他部署との連携を強化しながら、学生自身が課題を整理し、解決できるよう支援していくことが重要であると考える。

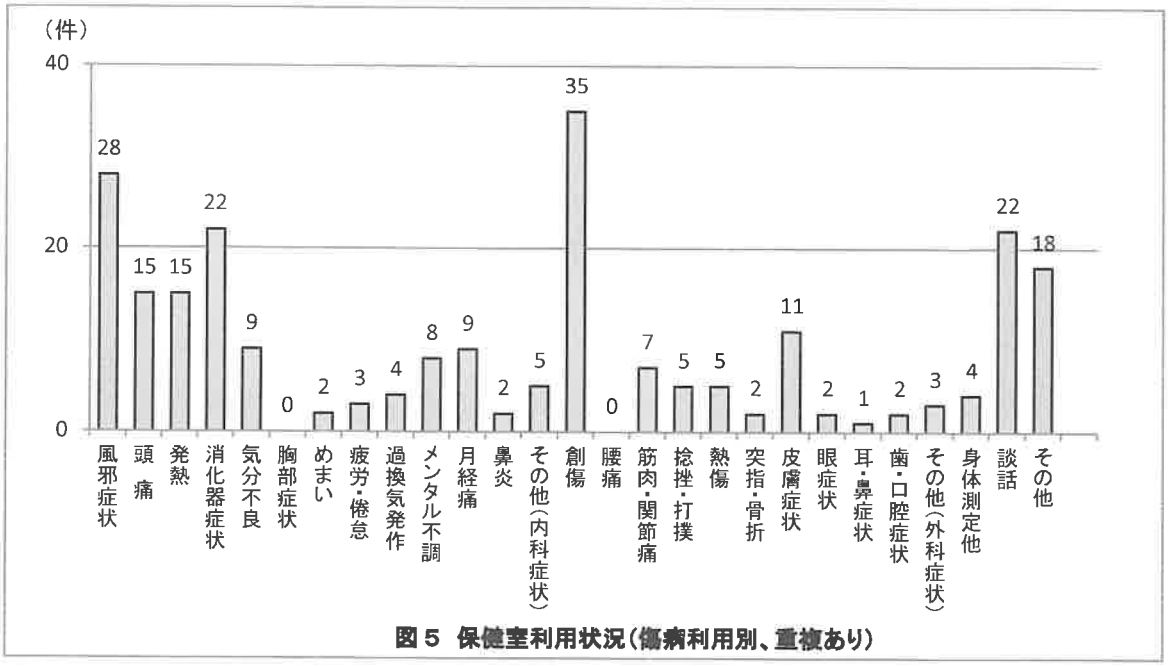


図５ 保健室利用状況（傷病利用別、重複あり）

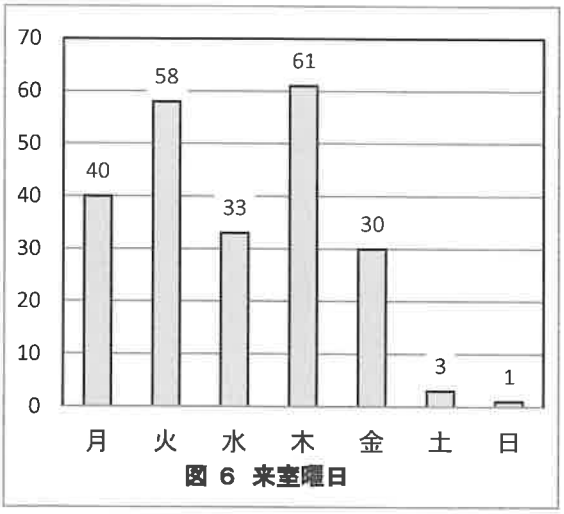


図６ 来室曜日

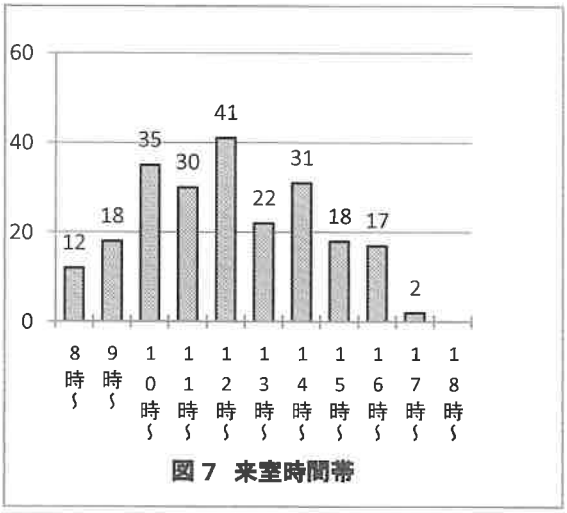


図７ 来室時間帯

表３ ベット休養処置、受診及び受診勧告件数

	休養	受診	受診勧告
4月	8	1	3
5月	7	0	1
6月	9	3	1
7月	5	0	1
8月	1	0	0
9月	1	1	0
10月	8	2	3
11月	7	1	2
12月	0	0	4
1月	3	0	2
2月	0	1	0
3月	2	0	0
計	51	9	17

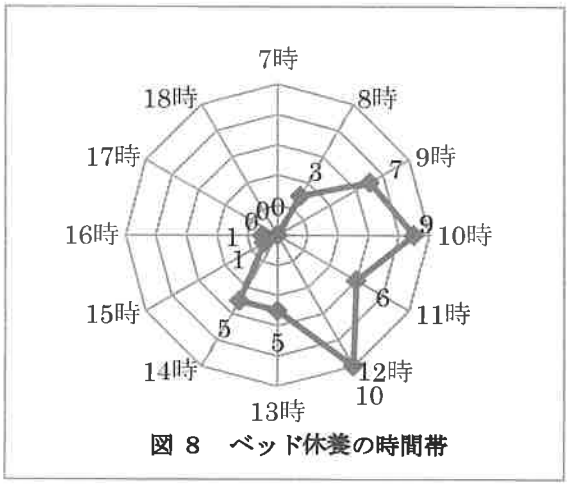


図８ ベッド休養の時間帯

表4　令和7年度保健室利用状況

社会福祉学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	0	1	1	0	0	2	4
5月	0	1	1	1	0	2	5
6月	0	1	3	3	0	3	10
7月	1	3	0	1	0	2	7
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	1	0	0	1	2
10月	0	1	4	1	0	3	9
11月	1	3	0	0	0	2	6
12月	1	3	0	0	0	3	7
1月	2	0	0	1	0	0	3
2月	0	0	0	0	0	2	2
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	5	13	10	7	0	20	55

薬学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	2	7	0	4	0	2	15
5月	0	6	1	2	0	0	9
6月	2	6	0	5	0	0	13
7月	0	1	0	1	0	1	3
8月	0	0	2	1	0	0	3
9月	0	0	0	1	0	0	1
10月	1	5	0	2	4	0	12
11月	0	3	1	1	0	0	5
12月	0	2	1	2	0	0	5
1月	0	5	0	0	1	0	6
2月	0	0	0	0	0	1	1
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	5	35	5	19	5	4	73

生命医科学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	0	0	0	1	0	0	1
5月	0	0	0	1	0	0	1
6月	0	1	0	1	0	0	2
7月	0	2	0	0	0	1	3
8月	1	0	0	0	0	0	1
9月	0	0	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	1	0	1	2
11月	0	0	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0	0	0
1月	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	1	3	0	4	0	2	10

臨床心理学部

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	0	3	0	2	0	0	5
5月	2	4	0	0	0	0	6
6月	2	1	1	0	0	0	4
7月	1	0	1	1	0	1	4
8月	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	1	0	0	0	0	1
10月	3	2	0	0	0	2	7
11月	2	3	0	1	0	1	7
12月	3	0	0	0	0	0	3
1月	0	1	0	0	0	0	1
2月	0	0	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0	0	0
合計	13	15	2	4	0	4	38

教職員

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	1	1	1	0	0	0	3
5月	0	1	0	0	1	0	2
6月	1	1	0	0	0	0	2
7月	0	0	2	0	1	0	3
8月	0	0	0	2	0	0	2
9月	0	1	1	0	0	0	2
10月	1	0	1	0	1	0	3
11月	2	0	0	0	0	0	2
12月	0	2	0	1	0	0	3
1月	0	2	3	2	0	2	9
2月	1	0	0	0	0	0	1
3月	1	3	1	1	0	0	6
合計	7	11	9	6	3	2	38

その他

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0	0
7月	1	0	0	0	0	0	1
8月	0	0	1	0	0	0	1
9月	0	0	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	0	0	0	0
11月	1	0	2	0	0	2	5
12月	0	0	0	0	0	0	0
1月	0	0	0	0	2	0	2
2月	0	0	1	0	0	0	1
3月	0	2	0	0	0	0	2
合計	2	2	4	0	2	2	12

総　計(男女/症状別)

	内科症状		外科症状		その他		合計
	男	女	男	女	男	女	
4月	3	12	2	7	0	4	28
5月	2	12	2	4	1	2	23
6月	5	10	4	9	0	3	31
7月	3	6	3	3	1	5	21
8月	1	0	2	4	0	0	7
9月	0	2	2	1	0	1	6
10月	5	8	5	4	5	6	33
11月	6	9	3	2	0	5	25
12月	4	7	1	3	0	3	18
1月	2	8	3	3	3	2	21
2月	1	0	1	0	0	3	5
3月	1	5	1	1	0	0	8
合計	33	79	29	41	10	34	226

総計(所属別)

	社福	薬学	生命医科	臨心	教職員	他	合計
4月	4	15	1	5	3	0	28
5月	5	9	1	6	2	0	23
6月	10	13	2	4	2	0	31
7月	7	3	3	4	3	1	21
8月	0	3	1	0	2	1	7
9月	2	1	0	1	2	0	6
10月	9	12	2	7	3	0	33
11月	6	5	0	7	2	5	25
12月	7	5	0	3	3	0	18
1月	3	6	0	1	9	2	21
2月	2	1	0	0	1	1	5
3月	0	0	0	0	6	2	8
合計	55	73	10	38	38	12	226

甲斐　十貴枝

Ⅳ　付録

1　事例で考える学生相談のポイント

九州医療科学大学　臨床心理学部　臨床心理学科　講師
健康管理センター　学生相談専門委員
染矢　真実

2　ＡＥＤ設置マップ

事例で考える
学生相談のポイント

九州医療科学大学　臨床心理学部　臨床心理学科　講師
健康管理センター　学生相談室専門委員

染矢真実（公認心理師・臨床心理士）

相談場面の基本的スキル

正対	自分の体（おへそ）を相手に向ける
視線	目で聴く（相手の鼻あたりを見る）
反応	①マジックワード　②ジョイニング
受容	I'm OK. You are OK.
安全	心理的安全性（③ラポール形成）

①マジックワード

あ　「ああ～」

い　「いいですね」

う　「うんうん」

え　「えっ!」

お　「おー!」

パ　パチパチ（拍手）



②ジョイニング

感情や体験に合わせていく（joinする）こと

●方法

・聞こえたことや見たことを、そのまま言葉にする

→相手が使った言葉や強調された言葉をそのまま繰り返す

●ルール

・相手の感情を反映する

・自分の解釈を押し付けない

③ラポール形成

「オープン・クエスチョン」で相談内容（主訴）に関することを学生自身の言葉で話してもらい、ラポール関係の形成に努める。

問題がある程度明確化された段階で、収集したい情報を直接尋ねる「クローズド・クエスチョン」を活用する。

事例Ⅰ

- 水田さんは、ある大学の教員でチューターも担当している30代男性です。あるとき、1年生の女子学生さおりさんが、「大学を辞めたい」ことを主訴に相談に来ました。
- さおりさんは泣きながら「授業が難しくてついていく自信がない」「友達も家族も優秀で、落ちこぼれの自分の気持ちは誰もわかってくれない」と語ります。
- 気分転換の方法について話題になったときに、さおりさんがよく絵を描いてSNSに投稿していることを水田さんが「いい趣味だね」と褒めると、さおりさんは喜んで、「先生もフォローしてください。そうしたらもっと頑張るから」と頼んできました。水田さんは、さおりさんとの関係づくりや自信の向上にも役立つだろうと考えて、フォローを約束しました。

事例のつづき

・またあるとき、水田さんは大学時代の同期と食事に行きました。
・相手は現在病院で働いており、お互いの仕事の話に花が咲きました。
・お酒が入っていたこともあり、「さおりさんという学生がいて・・・」「大学にはまだまだ頭のかたい先生もいて・・・」などと、自分の担当している学生の相談内容や、苦労話について、つい熱心に語ってしまいました。



Q.水田さんの対応には、問題がありそうです。
どんなところでしょうか？

事例Ⅰに見られる課題：多重関係

・多重関係とは、要支援者との間に、公的関係以外の別の関係をもつことです。
・SNS、特にプライベートのアカウントに関しては、公的ではないプライベートな時間、空間において関係を持つことを意味します。
・SNSのフォローを始めれば、さおりさんの期待がふくらみ、水田さんがそれに応えられなくなったときに、さおりさんが傷ついてしまうかもしれません。

もし、真夜中に「今すぐ相談に乗ってほしい」とメッセージがきたら、対応することは可能でしょうか？！

多重関係とは

・要支援者との間に、公的な役割とは別の役割を、意図的かつ明確に同時にあるいは継続的にとること。

例）教員と学生という本来の関係以外に、友人、金銭関係、教員自身の悩みを聞いてもらう関係など

学生を支えたいという思いがあっても、教員一人で抱え込むことで、関係が複雑になる場合があります。立場を利用して、職務とは無関係な利益を得るなどの搾取的な行為に発展することがありえます。

ポイント：大切なのは、学生の利益や安全、教職員としての公平性、関係性への影響を考えることです。

気をつけたい多重関係の例

友人・恋愛関係でなくても、
- 個人的に食事に出かけるなどの交流を持つ NG
- 関係の発展を期待させるような言動 NG



例えば、
・教職員が過度に個人的な事柄や悩みなどを自己開示する
- 学生のサークル活動で、顧問としての立場を超えて個人的な利害を持つ

ポイント：
教員と学生の力関係が、学生の意思決定に影響していないか？
「支援をする人」「支援を受ける人」の立場で一定の力関係ができやすくなり、他の関係に影響すると、要支援者の不利益につながる恐れがあります。

教員に向けられる『転移』
―関係がより複雑になることも

・**転移とは、学生が過去の重要な人との関係で抱いた感情や期待を、目の前の教員に向けることです。**

● **陽性転移：愛情・尊敬・憧れなどのポジティブな感情**
例：「先生だけは自分のことを分かってくれる」
例：先生に強い憧れを抱き、特別な関係を求める。



● **陰性転移：敵意・反発・不信感などのネガティブな感情**
例：「先生に分かってもらえない」と強く反発する。
例：先生の何気ない言葉に傷つき、拒絶されたと感じる。



事例Ⅰのポイント①支援関係の「枠」を守る

・SNSをフォローすることは、中立性や客観性が、個人的な交流から生じた感情のために損なわれる可能性があります。
・多重関係では、複雑な問題に発展しやすくなります。また、要支援者の依存性を高めるなど、支援が適切に行われなくなることがありえます。

A.支援関係の枠（役割・時間・場所）が保てなくなるという観点からも、SNSのやり取りは問題です。

多重関係を避けることは、教職員が安心して働き続けるためにも重要です。

事例Ⅰのポイント②秘密保持を守る

・業務に関して知り得た人の秘密（相談内容）を第三者に話すというものであり、秘密保持の観点から問題があります。

・例えば、大学時代の同期は、実は何らかの事情でさおりさんことを知っていたという可能性があります。
・また、食事場面の周囲に会話の内容が聞こえてしまうこともないとはいえません。
・近くに関係者がいなくても、教職員としての信用を損なう恐れがあります。

信頼を裏切らないよう、勤務時間外の振る舞いにも注意しましょう。

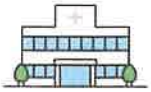
事例Ⅱ



・みさ子さんは大学の職員として勤務しています。
・新学期が始まった5月、留学生のシンさんが教員に連れられて相談に訪れました。4月に留学してきたばかりのシンさんは、母国を離れて一人暮らしを始めたばかりです。シンさんの表情はとても暗く、もう自分は終わりだとつぶやくばかりです。なんでも、キャンパスのどこにいてもまわりの学生から陰口を言われていて、居場所がないとのことでした。みさ子さんが慣れない英語で辛抱強く話を聞いてみると、これまでにも春先には理由もなく調子を崩すことがあり、高校時代には何度か自殺を図り、母国で入院したこともあるようです。そこで、みさ子さんは「誰でも新しい環境はストレスに感じるものよ」と支持的に接し、「みんながいじわるしないよう、担当の先生にも言ってあげるわ」と今後の支援方針を説明しました。

Q.みさ子さんの支援は適切でしょうか？

A.必要な支援は、心理的支援だけではない



- 支援には、職種や専門ごとに可能な範囲があります。
- 私たちはつい、学生の問題を心理的な問題ととらえ、心理的関わりのみで支援しようとしがちです。それにより、薬物療法が必要な重度のうつ病や統合失調症に対して適切な支援ができなかった場合、学生が自殺する場合もありえます。
- 事例Ⅱは、心理支援よりも診断や薬物療法をはじめとした治療が必要である可能性が高いため、医療機関につなぐことが重要です。

＊他の専門家（病院・学生相談室・学生課等）へつないでも、教職員は学生の支援チームの一員としてサポートすることが可能です。

問題は生物・心理・社会モデルで見る（biopsychosocial model：BPSモデル）



- BPSモデルは、1977年、米国内科医・精神科医**ジョージ・エンゲル**が提唱したそれまでの生物医学（Biomedicine）モデルに代わる医学観。
- 人間が抱える問題は、「生物的要因」「心理的要因」「社会的要因」から成り立っており、それが相互に影響し合っていることに着目した考え方。

ポイント：心理的要因だけでなく、生物学的要因・社会的要因も併せて問題を理解しましょう。

学生相談室につなぐときのポイント



① まず受け止める
学生の話を遮らず、気持ちや困りごとを理解しようとする

② 学生相談室につなぐ理由を伝える
「あなたのことをもっと支えたいから」と説明する（NG例「それは私には対応できないから、相談室に行った方がいいよ」）

③ 学生の意思を尊重する
一方的に勧めず、不安や抵抗感も聴きながら相談する

④ つないだ後も関係を続ける
学生相談室を紹介した後も、チューターとして声をかけ、気にかけていることを伝える

⑤ 一人で抱え込まない
対応に迷ったら、学生を紹介する前でも学生相談室と連携する

学生も教職員も一人で悩まないで

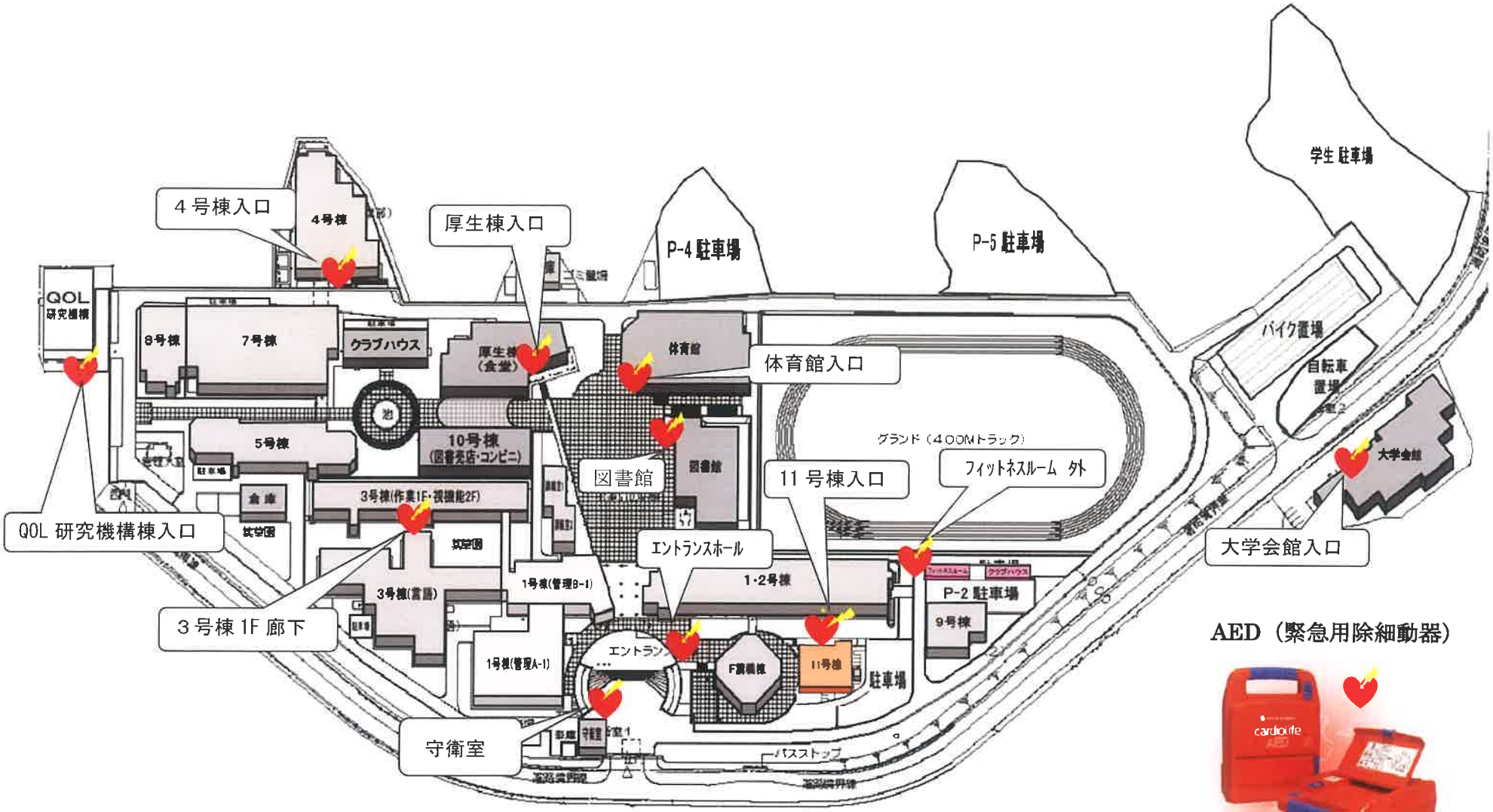
学生への声かけ例
「話してくれてありがとう。これからのことを一緒に考えていきたいと思っています。あなたのことをしっかり支えたいので、学生相談室にも相談してみませんか？」

＊対応に迷ったときは、学生を紹介する前でも学生相談室にお気軽にご相談ください。

＊教職員がつながり、それぞれの立場から学生を支えていきましょう。本学の「チューターマニュアル」もご参照ください。

参考文献：下山晴彦・慶野遥香（編著）（2020）『公認心理師の職責』ミネルヴァ書房.
※事例は上記文献を参考に、資料用に一部改編して使用。

AEDマップ



AED（緊急用除細動器）

九州医療科学大学
健康管理センター活動報告書 No.19
令和 8 年 11 月発行
表紙装丁　甲斐　十貴枝
写真　加藤　謙介（臨床心理学部　教授）
発 行 者　九州医療科学大学　健康管理センター
〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町 1714-1
TEL　0982-23-5555（代表）
印 刷 所　JEI ドキュメントセンター
〒716-0018　岡山県高梁市伊賀町 8
TEL　0866-56-3536

あなたの学びを あなたのカタチに

九州医療科学大学

Kyushu University of Medical Science

九州医療科学大学

令和7年度

健康管理センター活動報告書